

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

4

Vol.44 No.4 APRIL

2021

子どもの排尿・排便



新連載

児童養護施設の看護実践

児童養護施設の現状と
看護師の活動

心が歌えば、世界が揺れる
名もなき話

きょうだいとトモダチの不思議な関係
きょうだい関係と友人関係の関わり

へるす出版

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第1回 名もなき話

人と会えなくなって様々な変化が取り沙汰されている。インターネットの買い物が増えたとか、出勤日数が減ったとか、いろいろである。そのなかでも、世間で減ったもののひとつに「ここだけの話」がある。その時、その人との間にだけで生まれる秘密めいた会話だ。

わざわざメールで書くほどのことでもないし、電話で伝えることでもない。しかも、相手がそれを知ったからといって、どうということもない他愛のない話だ。その人に直接会えたときに思いもよらずふと話してしまうのである。

「ここだけの話」は、相手と親密な感情を共有したという感覚をもたらす。お互いに関係が深まったような印象を残す。話した側はさほど気にしていなくても、「ここだけの話」というのは、いつでも聞く人の心をつかむ。そして、ときには人の行動を変え、事の顛末を大きく変えてしまうことさえある。

何か月も何年も経ってから、話の意味がわかることもある。だから、人の話には白黒をつけず、解釈の余地を残しておくのも悪くはない。だが所詮、「ここだけの話」なので、その話が事態を大きく変えたとしても、その証拠などどこにも残らない。一陣の風のようなものである。

患者さん同士は「ここだけの話」でもちきりだ。自分の担当医の趣味はこれこれだの、看護師の出身地はどこそこの、自分だけが知っていると思うと何だか無性に嬉しくなる。患者さんは、多かれ少なかれ、医療者に自分のことを特別に思ってもらいたいので、自分も相

手のことを特別に知りたいと思う気持ちが根底にある。

しかしこれこそが信頼関係であることは、臨床のごく初期に痛感させられる。誰かを「担当する」ということは「私にはわかるよ」という関係にまで到達することだ。もちろん実際にはわからないことのほうが多い。でも、それさえも肝に銘じながら、ほかの人がちょっと見ただけではわからないだろうけど、「私はあなたのことをずっと見てきているから」と患者さんに思わせられるかどうか腕の見せどころとなる。そういう関係ができた患者さんのことは自ずから気になるし、大事にする。病態だけでなく、その人のことが気になる。患者さんのほうも、ほかの誰でもない、あなたに話を聞いてほしいと思うようになる。

入職して初めてのゴールデンウィーク。電車は行楽に出かける親子連れで賑わっていた。私は勤務外でも病棟に向かっていた。何とはなく気になるからである。といっても、子どもの顔を見る程度である。私にできることはなくても、とりあえず、あらゆることを知れたかった。患者・家族だけでなく、医師や看護師のことも知れたかった。明るい日差しの中、閑散とした病棟で子どもと家族は過ごしていた。

精神科医のサリバングが臨床の秘訣として、はっきりと「患者に興味をもつこと」と書いていたのを大学院時代に読んだ。それを今風にいえば、トータルケアなのだろう。これもまた、取るに足らない私の昔話である。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士、心理学者。臨床心理士、公認心理師。富山県高岡市出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究を行う。小児がんの子どもと家族を支えるエゴノクラブを主宰する。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。